



# 『おくりびと』 本木雅弘さん 本誌独占インタビュー

2009年2月に米国アカデミー賞で外国語映画賞を受賞し、日本国内だけでなく世界各地で話題となっている映画『おくりびと』。豪州では10月から上映が始まり、パースでは去る12月7日から13日にアウトドアシネマの“Lotterywest Festival Films”で限定公開された。同映画が話題となった理由の1つに、主演の本木雅弘さんの情緒ある洗練された演技があることは言うまでもない。本誌では、11月26日にゴールドコーストで開催されたアジア太平洋映画賞(Asia Pacific Screen Awards)の最優秀男優賞にノミネートされ、同賞にゲストとして来豪した本木さんに独占電話インタビューを行なった。穏やかな口調で、丁寧に質問に答えてゆく本木さんの一言一言からは、作品に込められた強い想いを感じた。

Photo courtesy of Asia Pacific Screen Awards

『納棺師』という職業を題材とした作品の発案者は本木さんということですが、そのきっかけをお聞かせください。

—およそ17年前にインドを旅しました。その時、ベナレスというヒンドゥー教の聖地で、ガンジス川沿いで火葬をしている様子を見て、1枚の絵の中に『生と死』が共存していることに感動しました。都市生活では、生と死というものの中で、死という部分はほぼ隠されていますよね。ですが、インドでは日常生活の中に当たり前に生と死が共存していたんです。そのことに非常にショックを受けるとともに、そのシーンを見た時に、いわゆる命のバトンタッチが目の前でやられているような安心感を覚えました。それで、日本に戻ってから、青木新門さんが書いた『納棺夫日記』という本を通じて納棺の世界を知ることになりました。その本の中には、自分がインドで感じた心の動きのようなことが描かれていたんですね。

それで、日本ではこの納棺の時間の中に、その命のバトンタッチの感動があると思ひ、いつか映画にしたいと思っていました。

**納棺師の遺体に対する繊細な動き、遺族に対する心遣いなど、作品から日本らしさをとても感じました。**

—そうですね。私自身も、映画を撮影するにあたって、実際の納棺の現場も体験させて頂いて、トレーニングもしました。その時に、日本のいわゆるお茶の作法とか、そういうものに通ずる様式美を感じたんですね。また、納棺師の動き一つひとつというのは、遺族の皆さんになり代わって、安らかな旅立ちのお手伝いとして自分の手を動かしているということなので、非常に細かい心配りがないといけない仕事なんです。

日本人以外の方々に作品を通して感じてもらいたいことは何ですか？

—生と死について考えるというのは世界共通のテーマだと思うので、誰もが映画のシーンごとでそれぞれの個人的な感情とか思い出が甦ると思うんですね。ふとそれまでに経験した死のことを思い出して、物語が個人的なものとして浸透していくっていうふうに、よく感想として言われます。ある意味、非常に分かりやすいストーリーですから、ストーリーに翻弄されるというよりも、最終的には皆さんが個人的な物語に膨らませてゆく、そういう面白さがあると思うんです。

基本的に死を描いていますが、生きるための映画、希望を与える、安心感を与えるための映画なんです。観た方にそう感じてもらうために今回、滝田監督と、TV番組をたくさん手がけてきて非常にお客さんに近い感情を持っている脚本家の小山さんのアレンジによって、非常にユー



アジア太平洋映画賞で最優秀男優賞を受賞した本木雅弘さん  
Photo courtesy of Asia Pacific Screen Awards

モアを交えてこの世界を描くことができたとおもうんですね。ですので、笑いながら泣いてもらえるような映画になっていると思います。

### 米アカデミー賞の外国語映画賞を受賞された時の感想をお聞かせください。

—もう私自身はその渦中にいて、台風の中の中にいるような感じで、自分自身はその奇跡に安心して止まっている感じでした。その時、特に本国日本では、黒澤明監督が今でいう外国語映画賞の代わりであった賞を受賞して以来、およそ50年ぶりの受賞、またモダンの映画としては初の快挙ということで、非常にフィーバーしました。そして、世界的な金融ショックの影響で世の中が少し疲れているっていう状態に飛び込んだ非常に明るいニュースとして、国民の皆さんにとっても元気になったということで二重にも三重にも喜びが広がっていました。ですから、帰った時には本当になんだか金メダルを取ったオリンピック選手以上の歓迎ぶりに戸惑ったぐらいでした。

作品に『石文』が登場しますが、本木さんの今のお気持ちを石の形状に例えたら、どのようなものでしょうか？

※石文…石の形や大きさなどで相手に想いを伝えること。

— (笑) そうですね…、抱えきれないほど大きな岩に近いプレッシャーを感じているっていうふうにも言いたい部分がありますが (笑)。でもですね、非常に小さいですが、これから自分が生きていくための糧となる、誰にも砕くことのできない輝きを持ったダイヤモンドの原石を握っているような、そんな気分ですね。

今回のアジア太平洋映画賞で、本木さんは最優秀男優賞にノミネートされていますが、その感想をお聞かせください。

—今年最後の大きなご褒美だと思っています。こういう大きな映画賞に参加できるのは多分、今年最後だと思うので、そういう意味で貴重な体験だと思っています。そして、非常にリラックスして、この映画賞と共にオーストラリアを楽しんでいます。 ※インタビューは授賞式前に行なわれました。

## おくりびと Departures

遺体を棺桶に納める納棺師。あるきっかけで納棺師として働くことになった大悟は、人の死に携わる仕事に戸惑いながらも、死者と遺族の別れと旅立ちの儀式を手掛ける職業の大きな意義に気付いてゆく。監督は滝田洋二郎、脚本は小山薫堂、出演は本木雅弘、広末涼子、山崎努ら。日本では2008年9月に公開、その後世界各国で上映されている。米アカデミー賞外国語映画賞、日本アカデミー賞各賞など、映画賞を多数受賞。



Photo courtesy of Madman Entertainment

最後に、パースで生活をしている本誌の読者にメッセージをお願いします。

—私も外国に友人がいますが、話を聞いていると、日本にいる日本人よりも外国に住んでいる日本人の方のほうが、ずっと日本の文化や歴史に対する造詣や思いが深いということにいつも驚くんですね。ですから、パースの皆さんにもこの映画をより深く、楽しんでもらえるんじゃないかと思っています。

また、NHKで3年間にわたって司馬遼太郎さんの『坂の上の雲』という日露戦争を描いたドラマが今撮影中で、ちょうどこの冬から放送されます。そちらのほうもチャンスがあれば観て頂けたらと思います。

### 本木雅弘 (もとき まさひろ)

1965年12月21日生まれ。埼玉県出身。俳優、歌手。1981年ドラマ『2年B組仙八先生』でデビューし、アイドルグループ『シブがき隊』のメンバーとして活躍。その後、映画、テレビ、CM等で幅広く活躍し、主演した2008年公開の映画『おくりびと』が第81回米アカデミー賞外国語映画賞を受賞。現在、NHK総合で放送中のスペシャルドラマ『坂の上の雲』に出演中。

パースで『おくりびと』が限定公開された“Lotterywest Festival Films”。公開初日となった12月7日は、この話題作を鑑賞するため約630人が集まり、日本美溢れる納棺師の世界に酔いしれた。同映画祭は毎年パース近郊の2ヶ所のアウトドアシネマで開かれ、外国語映画を含む世界中の話題作を上映している。

期日：～2010年4月18日(日)

場所：Somerville Auditorium (西オーストラリア大学キャンパス内), Crawley  
Joondalup Pines (エディス・コーワン大学キャンパス内), Joondalup

入場料金：大人 \$15、学生 \$11 ウェブサイト：www.perthfestival.com.au



開放感溢れる Somerville Auditorium の場内  
Photo courtesy of Lotterywest Festival Films